

《研究ノート》

国際ソーシャルワークの新概念を活用する手法

Promoting Dialogue Using the New Concept of International Social Work

東田 全央

Masateru HIGASHIDA

要旨

本稿は、拙共編著『国際ソーシャルワーク—新たな概念構築』（旬報社）の中で新しく構築された国際ソーシャルワークの概念を多様な対話の場に積極的に用いる手法について探索的に開発することを目的とした。はじめに、分析枠組みとして、社会的表象理論の視点を援用しながら、間主観的で対人間のミクロレベルから集合的なレベルの軸と、内省的から外在的までの軸の二軸で整理を行った。そして、国際ソーシャルワークの新たな概念を「トーチ」（松明あるいは聖火）、省察的な対話の作用を「鏡」とするメタファーを提案したうえで、筆者が他の研究者や実践家と対話した経験等を踏まえて、二つの手法を示した。第一に、「鏡に映して語る」こととして、実践家間の対話における活用法を例示した。第二に、「トーチを語る」こととして、国際ソーシャルワークに関する学術的な議論での活用法を示した。そして、それぞれの特徴や利点、適用可能性について論じた。それらの手法に対する詳細の検証は今後なされる必要があり、本稿は試論の域を出ていないが、新たな国際ソーシャルワークの概念の活用可能性を具体的に示すことに意義がある。

キーワード：対話、越境、理念、省察、社会的表象

1. はじめに

(1) 背景

世界ではさまざまな社会問題が国境を越え、人びとの生活に影響を及ぼしている。たとえば、戦争・紛争と難民問題、貧困と経済格差、疾病や感染症と公衆衛生の危機、気候変動と環境問題、食料安全保障問題と水資源の枯渇、人権侵害と差別問題、テロリズムや国際犯罪、教育の格差と識字率の低さ、デジタル格差とサイバーセキュリティに関する問題、国際政治の対立とグローバルガバナンスの課題等、それぞれが複雑に絡み合い、影響をもたらしている（Cox & Pawar, 2013; Higashida, 2024d）。そのような人びとが直面し複雑化する危機について、たとえば、「複合危機」と人間の安全保障の観点から議論されることもある（JICA Ogata Research Institute, 2024）。

複雑化し不確実化する国際社会の文脈においてソーシャルワークに求められる視点とはどのようなもので、それはどのように活かされるものであろうか。世界的に有名な定義（Healy & Thomas, 2021）では、国際ソーシャルワークとは「人間の尊厳と人権を促進し、人間の幸福を高めることを目的とした、ソーシャルワーク専門職およびその構成員による国際的な専門的活動ならびに国際的な活動能力」とされる（pp. 7-8：筆者訳）。そして、

国境を越えたソーシャルワークが益々と求められることは疑いない。

しかしながら、国際ソーシャルワークの理論化およびその視点にはいくつかの課題や挑戦が指摘されてきた。第一の挑戦は、ある特定の社会文化を背景として構築され、かつ特定の価値や規範に基づく国際ソーシャルワークのグローバリゼーションを越えることである (Higashida, Akimoto, et al., 2024)。たとえば、英語の特権性や西欧の文化的および宗教的な規範が埋め込まれたソーシャルワークの知の一方向的な伝播に対する批判的な議論が活発化している (Gray & Coates, 2010; Midgley, 2016)。それに対して、国際ソーシャルワークを脱植民地化する必要性も提案されている (Hugman, 2022)。第二の挑戦として、国際ソーシャルワークの理論と実践との乖離がある。国際ソーシャルワークを支える基盤理論や概念については、たとえばグローバリゼーション、人権、社会正義等、いくつか指摘されてきた (Healy & Thomas, 2021)。しかし、「普遍的」な理論と文脈化された実践を結び付けることの難題やパラドックスを含め、国際ソーシャルワークそのものの理論化は大きな挑戦であることが指摘されている (bodhi, 2022; Healy, 2012; Higashida, 2024d)。

(2) 国際ソーシャルワークの新たな概念化とその課題

そのような世界的および学術的な背景の下で、拙共編著“International Social Work of All People in the Whole World: A New Construction (Second Edition)” (Higashida, Akimoto, et al., 2024) およびその和文・編集版の『国際ソーシャルワーク—新たな概念構築』(東田他, 2025) が刊行された。発案者であり主著者である秋元/Akimoto は、「西洋生まれのソーシャルワークの国際ソーシャルワーク」の位置づけを歴史的に明確にし (第1章)、もう一つの国際ソーシャルワークがあることを示した (第2章)。そして、国家論モデルという視座を提起し、かつ国内 (国別) のソーシャルワークに位置する国際ソーシャルワーク (A) との差別化を図りながら、理念型の国際ソーシャルワーク (原文では「国際ソーシャルワーク (B)」 および『国際ソーシャルワーク』) の新たな概念化を試みた。その新たな国際ソーシャルワークについて、次の定義を示した (秋元, 2025a)。

『国際ソーシャルワーク』は一定の理念に裏付けられた国境を超えたあるいは国境に関わるソーシャルワークである。対象は世界中のすべての国および地域のすべての人々であり、目的はその人々のウェルビーイングを向上することである。もたれなければいけない「ものの見方」は自国を含め主権国家の外からの目、複眼、あるいは二つ以上または共通の「もの差し」をもって見ることである。『国際ソーシャルワーク』はいかなる特定の国または地域、国民、国籍にいかなる重要性、優越性または劣等性を与えない。『国際ソーシャルワーク』の対語は「国内」ソーシャルワークである。

『国際ソーシャルワーク』はすべての土着 (インディジナス) のソーシャルワークと共通的に併存可能でなければならない。(秋元, 2025a:118 オリジナルの注釈は除く)

さらに、国際ソーシャルワークのエッセンスとして、国境、対象 (地球上のすべての人びと)、ものの見方としての「複眼」、無知の内省等を教授する方法が示された (第4章)。それは、おもに学生等を対象とし、世界地図を用いた教授が想定された。

同書は、これまでにない新たな国際ソーシャルワークの概念化を図り、もう一つの、オ

ルタナティブな表象を伴う議論を促しうるもので革新的であった (Higashida, 2024d; 東田, 2023)。しかしながら、その新たな概念化を、国境を越える対話や実践において、どのように用いることができるのか、あるいは実践と理論の相互作用をどのように考えることができるのかについては、いまだ十分な議論がなされていない (Higashida, 2024d)。そもそも、拙共編著の内容や視点も、世界のソーシャルワーク関係者にどこまで提示できているのかは不透明である。実際、2025年4月現在、筆者以外に、その書籍の被引用はほぼ見られない状況にある。さらに、国際ソーシャルワークの概念化において、仏教ソーシャルワークを例示して (第10章)、より広いソーシャルワーク像を提示した功績は大きいですが、特定の宗教的基盤等に根ざしたソーシャルワークを強調することは逆説的に特定の知への偏重のような方向を促しかねない (Higashida, 2024c)。そのため、より開かれた国際ソーシャルワークを探究することも必要である。

そこで、本稿は、新しく構築された国際ソーシャルワークの概念を多様な対話の場にいる手法について探索的に開発することを目的とする。本稿では、国際ソーシャルワークの新たな概念をどのように用いることができるか、という問いに焦点化する。はじめに、国際ソーシャルワークの新たな概念の分析的な枠組みや前提を提示したうえで手法を示す。そして、それぞれの手法の特徴や適用可能性等について論じる。

2. 方法—視点と準備

筆者は、拙共編著の企画・作成の過程および現実世界において、経験的に手法を試案し、また実験してきた。このセクションでは、手法を検討するための分析視点と枠組み、道具、その過程について示す。

(1) 視点および仮想的な枠組み

新たな国際ソーシャルワークの概念を適用する枠組みには幾通りもの可能性がある。本稿では、文脈として、様々なソーシャルワーク実践家—いわゆる狭義の専門職に限定されない—が参画する、国境を越える対話を想定した。その中でも、国際ソーシャルワークという概念や用語に馴染みがない人びとの間での、ある種、実験的な対話を想定した (東田, 2023)。そのうえで、セルジュ・モスコヴィツィ (Moscovici, 1973, 1981, 1984, 2000) が提起した社会的表象理論 (Social Representation Theory) の視点を援用しながら、対話における新たな国際ソーシャルワーク概念の活用のための象限をあらかじめ検討した。

本稿で視点として援用する社会的表象理論は、人びとの間で馴染みがなかった事象が、社会的な現実としてどのように構成され、諸個人や集団の相互作用を通じてどのように馴染みあるものになるのかについて分析し説明する社会心理学的理論である (矢守, 2000, 2001)。筆者は、ソーシャルワークや国際ソーシャルワークに関する論稿の中で、その視点の有用性を指摘しながら、度々援用を試みてきた (Higashida, 2024b, 2024c; Higashida et al., 2022; 東田, 2023)。さらに、社会的表象理論の視点を実践へ活用する指向性については、グループダイナミクス研究における協働的実践の考え方 (杉万, 1998) に影響を受けてきた。そして、本稿は、モスコヴィツィ (1984) が述べるように、社会的表象はしばしば広義の専門家による共同的な産物 (the product of a professional activity) にルーツがある、という発想にも着目した。したがって、本稿は主流の社会的表象に関する社会心理学

的研究というよりは、筆者の解釈による応用が多分に含まれることには留意いただきたい。

さて、モスコヴィッチ (Moscovici, 1981, 1984, 2000) らは、社会的表象について、人々が共有する社会的知識や言説の複合体として、日常的な社会的相互作用を通じて構成され、維持される過程に着目した。とくに、社会的表象理論では、諸個人や集団にとって新奇な事象が、社会的な意味をもった知や言説として生成され、人びとの日常世界に統合され馴致 (familiarisation) される過程とその作用に着目する (矢守, 2000, 2001)。そして、社会的表象としての現実、言語やイメージを含むシンボリックな表現等の相互作用を通じて構築される、と考える。つまり、諸個人の相互主観的な経験 (マイクロレベル) と集団や集合体における知 (集合的なレベル) ¹⁾ は密接に結びついているとともに、対人的なレベルからより集合的なレベルへとシフトしうるが、その構成され自存化する社会的表象の世界は諸個人の認識や行為を規定しうるという関係が想定される (Moscovici, 1984; 八ッ塚, 2001)。そのため、第1軸として、個人レベルから集合レベルの連続体を想定したが、個人レベルであっても他者との相互作用 (a dyadic or triadic relationship) を含むため、対人間 (interpersonal) と集合的 (collective) とした。

また、社会的表象の作用の結果として、馴致化され、物象化 (objectifying) されたような共通認識たるものが、個人の思考と外部の社会的環境 (それ自体が表象の作用にあるとみなされる) との相互作用を経て、どのように相互に影響をもたらすかも重要な論点となりうる (矢守, 2001)。言い換えると、内面化や内省には、社会的表象としての現実が諸個人にどのように受け止められ、諸個人の認識や行動にいかなる影響を与えるか、という側面がある。もう一つは、外的な社会的環境との相互作用である。社会的表象としての現実、既存の社会的な意味体系や社会的環境 (たとえば、学術的知見やメディア) と密接に関わり、影響をもたらしている。この外在的な視点では、社会的表象がどのように既存の社会的枠組みやシンボルに依存し、どのように伝播し浸透していくかも重要な側面である。そこから、第2軸を内省的 (introspective) と外在的 (externalised) とした。

つまり、社会的表象理論の視点を援用して、間主観的で対人的なマイクロレベルから集合的なレベルの軸と、内省的から外在的までの軸の二軸を提案することにした。象限 (quadrant) による整理 (Wilber, = 2019) を参考にしながら、国際ソーシャルワークの概念に関する対話について、この二軸を用いると、少なくとも四つの象限におけるプロセスを考えることができる (図1)。ただし、実際には、これらプロセスの象限の区分は必ずしも明確ではなく、スペクトラムとして理解され、ともに交差する部分があろう。

¹⁾ この点について、「集団的なレベル」とするかどうかについては議論の余地がある。モスコヴィッチ (Moscovici, 1984) は、デュルケムらによる「集合的表象」 (collective representations) との接点を指摘しつつも、それを批判的に考察しながら、社会的表象理論を提唱した。そのため、筆者はこの用語の使用について誤解をまねくおそれを認識している。本稿は、それらの関係について考察するものではないが、仮想的な枠組みの検討にあたって、狭義の集団のみならず、相互作用が薄いような集合についても考慮することを意図し、集合的なレベル、とした。しかし、後述のとおり、そのレベルに関して、実際のセッションでは集団の中での対話を念頭に置いている。

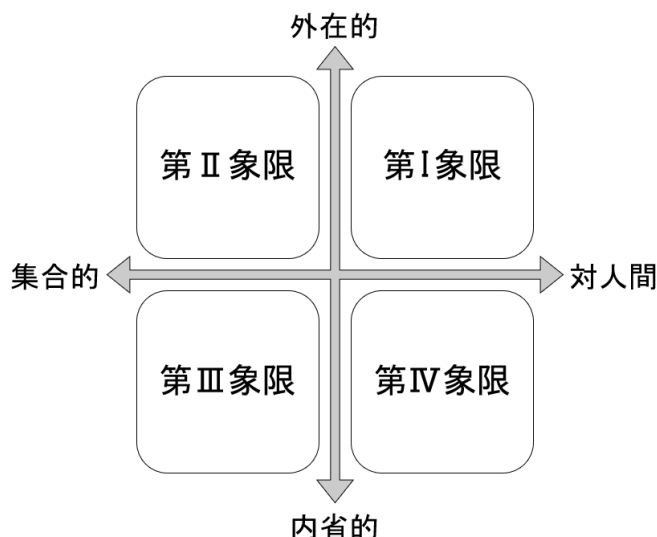


図1. 新たな国際ソーシャルワーク概念の対話における活用に関する象限

註：筆者作成

以上を踏まえ、国際ソーシャルワークに関する意図的で実験的な対話を実践家や関係者が行うことを想定した場合、象限ごとにどのようなプロセスがあるかについて仮想的に検討した。ここでは、学術的には国際ソーシャルワークが議論されているものの、多くの実践家にとっては必ずしも馴染みあるものではないということが前提とされた(東田, 2023)。加えて、一般的な社会的表象理論の研究とは異なり、意図的な対話セッションの試行(後述)を通じて記述した。なお、各象限は順番を示すのではなく、むしろ、実際の対話の中では象限が混在することが想定される。

第I象限(Quadrant I)は「対人間/外在的」(interpersonal, externalised)である。それは、他者と対話することを通じて、現実世界における個々の実践や既存のその他の概念が参照されながら、国際ソーシャルワーク(あるいは社会的表象としての国際ソーシャルワーク)が馴染みあるものとして、外在化および物象化される過程にある。対話の中では、共通理解に基づいてその意味を語り合うことが含まれる。各人の価値観や文化的背景を意識した対話の中で、国際ソーシャルワークのイメージに関して議論し、個々の実践との関係を客体化して捉えるようなプロセスもここに含まれるかもしれない。

第II象限(Quadrant II)は「集会的/外在的」(collective, externalised)である。より集団的な対話を通じて、あたかも物象化され自明化される国際ソーシャルワーク自体について語り合うことや、場合によっては、客体化された集団的な実践のあり方について問うことが含まれるプロセスである。その結果として、ある集団の中で、国際ソーシャルワークにかかわる具体的な実践についての対話を通じて問題の解決や解消を目指すことや、共通の目標を追求することについて語り合うことが含まれるかもしれない。

第III象限(Quadrant III)は「集会的/内省的」(collective, introspective)である。ある特定の集団の対話の中で、国際ソーシャルワークにかかわる共通の思考や意味を集団的かつ内面的に確認し、探求するプロセスである。その集団内での対話を通じて、共同体としての国際ソーシャルワークの意味や価値、経験等を深く掘り下げることや、共感に基づく社会的アイデンティティの醸成につながることを期待される。その探求の結果として、共同

体における凝集性をはぐくむ可能性がある。

第IV象限 (Quadrant IV) は「対人間／内省的」(interpersonal, introspective) である。国際ソーシャルワークに関して、他者との共有やコミュニケーションを重視しつつも、自己の内面的な理解や内省に着目する。それは、国際ソーシャルワークに関する自己の実践経験の意味やアイデンティティ等を、他者との感情や思考の交換を含む対話を通じて、位置づけ、見つめ直すプロセスともいえる。

(2) 道具

次に、対話における道具について、仮想の「トーチ」(松明あるいは聖火) 等をメタファーとして用いる。これは、秋元 (2025a) が、新たな概念としての『国際ソーシャルワーク』の理念型のトーチを掲げ、現実世界によってゆがめられた実態としての「国際ソーシャルワーク」(「ダッシュ」(‘) と称される) と「の間の溝を埋めること…理念型たる『国際ソーシャルワーク』に向けて導くこと」(p. 124) と述べたことに対応する。実際、拙共編著の編者間の中で大きな議論になったポイントの一つでもある。

そこで、本稿では、『国際ソーシャルワーク』の理念型を「トーチ」、不確実で矛盾を含む世界を「霧」、対人間および集団間における省察的な対話の作用を「鏡」、とするメタファーを利用する。鏡は曇りうることや、光の角度によって映り方が異なることが暗示される。

(3) 手法の開発過程

おもに 2022 年から 2025 年の間における筆者の国境を越える対話の経験や、『国際ソーシャルワーク—新たな概念構築』(Higashida, Akimoto, et al., 2024; 東田他, 2025) の編纂の過程での筆者自身の研究知見に着目した。その際、これまでに公表した筆者の論稿等と、研究過程で記した筆者の体験のノートを参考にした。その他、学術的な文献を補足的かつ統合的に参照した。本稿では、上記の分析視点と道具を用いながら、その期間中に試案した手法を記述的にまとめた。ただし、それぞれのアプローチの実際の手法は、文脈に応じて相違工夫が期待されるものである。いわゆるグループワークやその他の手段は場面と状況に応じて改変されてよかろう。

なお、本研究は主に文献・資料に基づいているが、対話等の活動を含む研究計画は旧所属先の青森県立保健大学研究倫理審査委員会 (No. 21017)、淑徳大学研究倫理審査委員会 (No. 2024-103)、および現所属先の島根大学研究倫理審査委員会 (No. 241101) にて承認され、実施された。拙共編著の利用等に関しては、2025 年 8 月にアジア国際社会福祉研究所の確認を経た。²⁾

²⁾ 2025 年 10 月現在、2027 年 3 月までの任期で、筆者はアジア国際社会福祉研究所よりプログラム研究員を委嘱されていた。他方、2025 年 12 月 11 日付で、同研究所より、「国際ソーシャルワーク分野において、今後の事業計画が確立されていないことから」、プログラム研究員としての任期が(遡って)同年 10 月 31 日までとなった、との通知を筆者は受け取った。本註は淑徳大学附属機関事務室の確認を経たものである。

3. 開発した手法

先述の新たな国際ソーシャルワーク概念を含むメタファーと道具を用いた対話手法の試案を提示する。以下、具体的なエピソードや留意点とともに示す。ただし、これから述べる手法は大枠を示すに過ぎない。

(1) 国境を超える対話—「鏡に映して語る」

一つ目の手法では、霧がかかるような不確実で不透明な世界において、トーチたる理念型「国際ソーシャルワーク」が照らす下で、人びとが鏡を前に語り合うというメタファーを使用する。そのねらいは、自己や集団の関与する文脈におけるソーシャルワークおよび国際ソーシャルワークの表象や経験を言語化し、浮かび上がらせ、対比し、そこから学び合うことにある。仮想的な枠組みとの関連では、おもに第Ⅲ象限「集合的／内省的」と第Ⅳ象限「対人間／内省的」にかかわり、理念型の国際ソーシャルワーク概念（トーチ）が示す（照らす）もとで、自己や集団の実践や実態とを対比する（鏡に映す）対話がなされる。それらにより、自己や集団の経験（言葉にならないものを含む）と（国際）ソーシャルワークが紐付けられつつ、それぞれの参加者にとっての国際ソーシャルワークが意味づけられることが想定される。

具体的な方法は参加者に応じていくつかありうるが、ここでは各国・地域の実践家や研究者等の国境を越えた対話を想定する。たとえば、ある対話セッションにおいて、ファシリテーター役から理念型の国際ソーシャルワーク概念のエッセンスが簡潔に紹介されるとする。その際、世界地図等を用いたミニレクチャーが取り入れられるかもしれない（秋元, 2025b; Higashida, 2025）。そして、国際ソーシャルワークの新たな定義とその解説とともに、三つの問い（①現場のソーシャルワーク実践において大切にしている言葉、概念、視点は何か、②なぜそれらが不可欠か（エピソードとともに）、③それらのルーツについてどう考えるか）と、英語のみに限定されない（つまり母国語等を積極的に推奨する）条件により、対話を促進する方法もある（Higashida, Attanayake, et al., 2024）。

いくつかの正義に関する議論を部分的に参考にしながら、この手法を試案した。とくに着想を得るために参考にしたのは、ジョン・ロールズ（Rawls, = 2010）をはじめとする思想家等による「反照的均衡」（あるいは反省的均衡）（reflective equilibrium）に関する議論とその解釈³⁾である。それは、正義に関する議論の中で、一般的な道徳的な原理・原則と特定の道徳的な判断の間の不均衡がある場合、相互に調整され均衡にいたる過程として提案された（Knight, 2023）。本研究は正義に関する議論ではないが、理念型の国際ソーシャルワークは「磨かれた鏡」を導くようなものであり、現実における対話を通じて、「一定の理念」との不均衡を調整することが想定された。

そして、この手法を、「ソーシャルワーカーの国際的・互恵的交流に関する理論的および実践的研究」（Project for promoting international exchange of local/indigenous social work knowledges: PIXSW）の中で、部分的に試行した。たとえば、2023年に、スリランカ・ソーシャルワーク専門職協会および国立社会開発学院（NISD）ソーシャルワーク校等と

³⁾ 反照的均衡の議論には Credibility、Relativism、Indeterminacy、Bias 等に関する異論や批判もある（Knight, 2023）。本研究は正義についての議論ではないものの、直観の正当性に依存しうる側面等、いくつかの批判は本稿の論旨にも提起されうるものとする。

もに、事前セッション等を経て、共催会議を開催した (Higashida et al., 2023)。同会議では参加者による個別発表後、実践家および研究者との対話セッションを実施した。その際、新たな国際ソーシャルワーク概念のエッセンスと先述の三つの問いの提示により対話が促進された。結果、参加者の発表と対話の知見に基づき、もう一つのソーシャルワークの実践知を相互探究する知見が書籍 (Higashida, Attanayake, et al., 2024) にまとめられた (Higashida et al., 2024)。さらに、2025 年より、PIXSW の新たな活動として、アジア諸国におけるソーシャルワーク実践家と研究者を中心とした、インディジナスな知の交流セッションを試行的に実施している (Higashida, M., Poonpoksini et al., 2025)。これらは、国際ソーシャルワークのみに特化した対話ではないものの、上記の手法を用いながら、国境を越える対話により、主たるソーシャルワークの言説とは異なりうる側面に光を当てている。

(2) 専門的で集中的な対話—「トーチを語る」

二つ目の手法では、トーチ自体を語るというメタファーを使用する。このねらいは、ソーシャルワークおよび国際ソーシャルワーク自体の再考を促すイノベーティブな対話を導くことである。仮想的な枠組みとの関連では、おもに第Ⅰ象限「対人間／外在的」と第Ⅱ象限「集会的／外在的」にかかわり、物象化される理念型の国際ソーシャルワーク概念（トーチ）と、現実世界における国際ソーシャルワークとの関係についての対比（鏡の機能）を含む議論が期待される。

具体的な方法として、拙共編著の本文や概念図等が用いられる。はじめに、ファシリテーター役がトーチたる理念型の「国際ソーシャルワーク」の見方を提示する。実際には、対話する人びとにおけるその理念型の解釈に依存することになる。ここでは、参加者にとって、拙共編著のとくに第3章 (秋元, 2025a) の読み込みと理解には相当の時間がかかるかもしれない。そのうえで、国際ソーシャルワークとそれに付随する既存の基礎的な表象、たとえば「ソーシャルワーク」、「ソーシャルワーカー」、「国際」、「国境」、「価値」、「規範」等について、具体的なエピソードや体験も踏まえながら、批判的な視点を持って議論する。実際、第3章に提示された概念には、いまだ十分には精査・検証されていない部分があり、それ自体を乗り越える必要もある (Higashida, 2024d)。非常に集中的な対話が期待されるため、小集団での対面実施がふさわしいかもしれない。

二つの思考が交差したところでこの手法を試案した。その一つとして、イヴァン・イリイチの思想等の解釈を通じて着想を得た。本研究の文脈においてイリイチらの主張 (Illich, = 1977; Illich et al., = 1984) を解釈すれば、既存の制度や社会構造と、その中にある価値観を批判的に考察することが重要である。言い換えると、本研究でいうところの「トーチ」を理想型として絶対視するのではなく、むしろ、現実社会における構造や現象とともに、トーチの灯火を再考することが重要である。そして、秋元の定義における「一定の理念」、あるいはそこに含まれる価値に対する考察も対話の鍵となりうる。

もう一つは、拙共編著の企画から作成の過程を含む、筆者自身の体験がモチーフになった。2022年から2023年にかけて、編者と、他の研究者とともに、何度かの議論がなされ、結果、第2版および和文版の同書が制作された。筆者自身も、その議論の体験から考えさせられたことは多く、実際、独自の視点と解釈を加えて執筆した論稿も一部影響を受けてきた (Higashida, 2024a, 2024c, 2024d; 東田他, 2023)。また、2024年2月に開催され、筆者

も登壇したある国際フォーラムでは、ある種同様のセッションが試みられた (Asian Research Institute for International Social Work, 2024; Kara, 2024)。⁴⁾

本手法の留意点は拙共編著の難解さにある。その中核的な視点はむしろシンプルともいえるものであるが、概念的な議論が深まるとき、抽象度が増す可能性がある。とくに、第3章で提示された国際ソーシャルワーク概念を物象化したような議論には、現実との乖離の可能性があるため留意が必要である。

4. 考察

(1) 手法の活用可能性と意義

本稿では、社会的表象理論の視点を援用するとともに、四つの象限の枠組みに照らし合わせながら、国際ソーシャルワークの新たな概念を対話に用いる二つの手法を提案した。その際、国際ソーシャルワークの新概念をトーチ、対人間および集団間における省察的な対話の機能を鏡と見立て、議論を進めてきた。

国際ソーシャルワークのエッセンスをどう示すかは重要なテーマであり、先述のとおり、世界地図を用いた例が提示されたことがある (秋元, 2025b; Higashida, 2025)。それは、ソーシャルワークの関係者(とくに学生)に、国際への意識化を促すことが明らかであった。しかし、本稿では、ソーシャルワークの実践家等による様々なレベルにおける対話を想定して、現実世界における実践に対する省察や、国際ソーシャルワークのあり方自体を問う議論等、より広い活用可能性の幅を示した。

本稿で示してきた手法は多様な文脈や場面で用いることが可能と考える。本稿では、境界を越える実践家間の対話に生かすことが一義的に検討されてきたが、それに限定はされない。実際、対話実践の例 (Higashida et al., 2023; Higashida, Attanayake, et al., 2024) が示唆するとおり、国内の実践家間等における対話であっても、それをメタ的に、あるいは俯瞰的および複眼的に、広義の(国際)ソーシャルワークについて問い、語り合い、再検討し合うことが可能であろう。

これはおそらく、国際ソーシャルワークの文脈において長年議論されているような、境界を越えて対等な立場で対話することに通じる。たとえば、Haug (2005) が次に述べるようなことに対応することが期待される。

対等な力関係に基づく真の対話を通じて、国際ソーシャルワークは、ソーシャルワークの歴史的ルーツ、現在のアイデンティティ、そして将来の実践の方向性を再構築し、ソーシャルワークが実践される状況の多様性を反映させ、現在私たちの地球が直面している危機に対して有意義な対応を生み出すことができる。(p. 133 : 筆者仮訳)

⁴⁾ 当時、筆者が主任研究員として在籍していたアジア国際社会福祉研究所主催の国際学術フォーラムのこと。テーマは『国際ソーシャルワーク理論研究 100 年の『その先』にはなにがあるのか?』(International social work beyond its centennial anniversary: Theory debate (Disappearance or expansion, reform or new construction?)) であり、筆者は「国際ソーシャルワーク理論再考」と題した発表を行った。その翌日において、リンヒーリー名誉教授とマノハ・パワール教授を交えて議論したクローズのセッション(専門家会議)の議論がなされた (Kara, 2024)。

それは、Dominelli (2020) がいう「相互学習」(reciprocated learning)、つまり対等な立場で各々がアイデア、洞察、あるいはスキル等を刺激的な対話形式で共有し、互いに学び合うことにも呼応するだろう。

他方、本稿では触れてこなかったが、対話実践の過程において、筆者は必ずしも成功的な経験ばかりをしたわけではない。たとえば、ある国際会議での特別セッションで、複数の国々のソーシャルワーク実践家との対話を促進しようとしたが、簡単な実践報告のし合いで終わってしまったことがある (Higashida et al., 2023)。いずれにせよ、本稿にある手法は、実践的な対話の中で、検証や修正がなされる必要がある。

(2) 限界と今後の課題

本稿は試論に過ぎず、手法や理論的な基盤に関して、さらなる改良の必要がある。とくに、西洋生まれ専門職ソーシャルワークや周辺理論の一方向性の問題を批判しながらも、それを超える理論的な枠組みはいまだ精緻に展開できていない部分がある。ルーマニア出身でフランス等にて活躍したモスコヴィッシが提起した、つまり広義の欧州由来の社会的表象理論の援用と解釈もその一つの矛盾である (Higashida, 2024d)。本稿では、今後の議論を活性化し、対話の可能性を開くことを意図したが、批判的な議論を経てより適した対話手法が提示されることが求められる。

また、国際ソーシャルワークに関してしばしば話題にあがる言語問題についても、いまだ大きな課題は残されたままである。本稿は和文で書かれており、また主流の議論はおもに英語でなされている。しかし、世界にはその他多数の言語があり、その中で語られることと、特定の言語(英語)でのみ語られることには大きなギャップがありうる (Akimoto, 2010; Gray & Coates, 2010; Harrison, 2006)。とくに、英語の特権性は根強く、国際ソーシャルワークの新たな概念の提示やそのさらなる理論的發展に向けては、言語問題を無視することはできない (Higashida, 2024d)。

5. 結論

本稿は、新しく構築された国際ソーシャルワークの概念を多様な対話の場を用いる手法について探索的に開発することを目的とした。筆者が経験したプロセスとその中での創意工夫も参照しながら、国際ソーシャルワークの新たな概念を対話の中で用いる手法を例示した。本稿では、それぞれの詳細の検証はなされておらず試論の域を出ていないが、新たな国際ソーシャルワークの概念の可能性を具体的に示す意義があった。今後、この新たな概念をどう生かすことができるかが真に問われる。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP24K16556, JP23K25597 の助成を受けたものです。また、本稿の論旨に関して、これまで私と対話や議論をいただいたすべての方々から感謝します。

文献

秋元樹 (2025a) 「新たな国際ソーシャルワークの建設 (構築)」. 東田全央・秋元樹・松尾

- 加奈編. 『国際ソーシャルワーク—新たな概念構築』 旬報社, pp. 79–127.
- 秋元樹 (2025b) 「国際ソーシャルワークのエッセンスと 9 枚の世界地図—どのように学生に国際ソーシャルワークの奥義を伝授するか」 東田全央・秋元樹・松尾加奈編. 『国際ソーシャルワーク—新たな概念構築』 旬報社, pp. 128–152.
- 杉万俊夫 (1998) 「実践としてのグループ・ダイナミクス」 『実験社会心理学研究』 38(2), 202–204.
- 東田全央 (2023) 「社会的表象としての国際ソーシャルワーク—開発の文脈における実践家の語りとの接点をめぐって」 『共生学ジャーナル』 7, 194–215.
- 東田全央・秋元樹・松尾加奈編 (2025) 『国際ソーシャルワーク—新たな概念構築』 旬報社.
- 八ッ塚一郎 (2001) 「社会的表象研究の実際と方法論的検討—C. Herzlich “Health and Illness” をめぐる考察—」 『総合研究所所報』 9, 101–116.
- 矢守克也 (2000) 「社会的表象理論と社会構成主義 W. Wagner の見解をめぐって」 『実験社会心理学研究』 40(2), 95–114.
- 矢守克也 (2001) 「社会的表象としての『活断層』」 『実験社会心理学研究』 41(1), 1–15.
- Akimoto, T. (2010) Language and human rights in international organisations: why does the IASSW have Japanese as an official language? *Ethical dilemmas in social work: international perspective, Faculty of Social Work, University of Ljubljana, Ljubljana*, 153–168.
- Asian Research Institute for International Social Work. (2024) *International social work beyond its centennial anniversary: Theory debate (Disappearance or expansion, reform or new construction?)*. Chiba: ARIISW.
- bodhi, s. r. (2022) International social work: theoretical decolonising from a tribal gaze. In S. A. Webb (Ed.), *The Routledge handbook of international critical social work: New perspectives and agendas*. Routledge.
- Cox, D., & Pawar, M. S. (2013) *International social work: Issues, strategies, and programs*. Sage.
- Dominelli, L. (2020) Personal reflections on 30 years of social work development in China. *China Journal of Social Work*, 13(1), 102–109.
- Gray, M., & Coates, J. (2010) From “indigenization” to cultural relevance. In M. Gray, J. Coates, & M. Yellow Bird (Eds.), *Indigenous social work around the world: Towards culturally relevant education and practice* (pp. 13–30). Routledge.
- Harrison, G. (2006) Broadening the conceptual lens on language in social work: Difference, diversity and English as a global language. *British Journal of Social Work*, 36(3), 401–418.
- Haug, E. (2005) Critical reflections on the emerging discourse of international social work. *International Social Work*, 48(2), 126–135.
- Healy, L. M. (2012) Defining International Social Work. In L. M. L. Healy, Rosemary J. (Eds.), *Handbook of International Social Work: Human Rights, Development, and the Global Profession* (pp. 9–15). Oxford University Press.
- Healy, L. M., & Thomas, R. L. (2021) *International social work: Professional action in an interdependent world, 3rd edition*. Oxford University Press.
- Higashida, M. (2024a) Asymmetrical relations in international developmental social work practices: Towards the co-creation of knowledge. In R. Baikady, J. Przeperski, S. S.M., & M.

- R. Islam (Eds.), *The Oxford Handbook of Power Politics and Social Work* (pp. 699–720). Oxford University Press.
- Higashida, M. (2024b, 4 April 2024) *Exploring alternative discourses on social work practices from the perspective of social representation theory*. The Joint Conference on Social Work, Education and Social Development (SWSD 2024), Panama.
- Higashida, M. (2024c) Process of constructing alternative social work discourses in Asia: A case study of Buddhist social work as social representation. *Asian Social Work and Policy Review*, 18(1).
- Higashida, M. (2024d) Re-examining international social work theory: “Where do we come from? What are we? Where are we going?”. *Discover Global Society*, 2(1).
- Higashida, M. (2025) International social work gap or unknown reality? A geographical perspective for social work education. *Social Work Education*. (in press)
- Higashida, M., Akimoto, T., & Matsuo, K. (Eds.) (2024) *International social work of all people in the whole world: a new construction (2nd ed)*. Junposha.
- Higashida, M., Poonpoksinsin, W., Attanayake, S., & Herath, C. (2025) Attitudes towards international exchange among social workers in the Asian context: An online survey. *International Social Work*, 68(6), 1014–1031.
- Higashida, M., Attanayake, S., Ranaweera, A., Ashker, M., & Kumara, H. W. R. (2023) Dialogue for reciprocal exchange of social work knowledge in Sri Lanka. *Annual Report of Asian Research Institute for International Social Work*, 7, 7–13.
- Higashida, M., Attanayake, S., Ranaweera, A., & Ashker, M. (Eds.) (2024) *Exploring alternative social work knowledge: Based on the narratives of practitioners from Sri Lanka*. Osaka Metropolitan University Press.
- Higashida, M., Ranaweera, A., & Herath, C. (2022) Exploring the Social Representations of Social Work in the Sri Lankan Cultural Context: A Qualitative Study. *Sustainability*, 14(23).
- Hugman, R. (2022) Decolonising international social work. In S. A. Webb (Ed.), *The Routledge handbook of international critical social work: New perspectives and agendas* (pp. 449–461). Taylor & Francis.
- Illich, I. (1971) *Deschooling Society*. Harper & Row. (= 1977, 東洋・小澤周三訳『脱学校の社会』東京創元社)
- Illich, I., Zola, I. K., McKnight, J., & Caplan, J. (1977) *Disabling Professions*. M. Boyars. (= 1984, 尾崎浩訳『専門家時代の幻想』新評論)
- JICA Ogata Research Institute. (2024) *Human Security, Politics and Society under Compounded Crises*. JICA Ogata Research Institute.
- Kara. (2024) The 8th International Academic Forum, featuring Prof. L. Healy, Prof. M. Pawar, and Dr. T. Akimoto. *Kara (ARIISW)*, 60.
- Knight, C. (2023) Reflective Equilibrium. In Edward N. Zalta & Uri Nodelman (Eds.), *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. Metaphysics Research Lab, Philosophy Department, Stanford University. <https://plato.stanford.edu/entries/reflective-equilibrium/>
- Midgley, J. (2016) Promoting reciprocal international social work exchanges: professional

- imperialism revisited. In M. Gray, J. Coates, & M. Y. Bird (Eds.), *Indigenous Social Work around the World* (pp. 31–45). Routledge.
- Moscovici, S. (1973) Foreword. In C. Herzlich (Ed.), *Health and illness: A social psychological analysis* (pp. ix–xiv). Academic Press.
- Moscovici, S. (1981) On social representations. In J. P. Forgas (Ed.), *Social cognition: Perspectives on everyday understanding* (pp. 181–209). Academic Press.
- Moscovici, S. (1984) The phenomenon of social representations. In R. M. Farr & S. Moscovici (Eds.), *Social representations* (pp. 3–69). Cambridge University Press.
- Moscovici, S. (2000) *Social representations: Explorations in social psychology*. Polity Press.
- Rawls, J. (1999) *A Theory of Justice: Revised edition*. Harvard University Press. (= 2010, 川本隆史・福間聡・神島裕子訳『正義論 改訂版』紀伊國屋書店)
- Wilber, K. (2000) *A theory of everything: an integral vision for business, politics, science, and spirituality*. Shambhala Publications. (= 2019, 加藤洋平・門林奨訳『インテグラル理論—多様で複雑な世界を読み解く新次元の成長モデル』日本能率協会マネジメントセンター)